

1. た・づ・な

新たな半世紀に向けて

日本中央競馬会

理事 佐藤 浩二



生産育成対策を平成16年2月より担当しております佐藤浩二でございます。2005年の年頭にあたりご挨拶申し上げます。昭和47年の入会以来30余年、臨床獣医師としての勤務を皮切りに、様々な仕事を通して、競馬事業の幅広さと奥行きを身をもって感じてまいりました。昨年、JRAは創立50周年を迎え、本年は新たな半世紀のスタートにあたりこれまでの競馬を振り返りますと、自身の仕事ともダブリその変化の大きさに感慨を覚えます。

まずあげられるのが、日本馬が強くなったということでしょう。昭和50年代、「強い馬作り」を標榜する中、第1回のジャパンカップで、ある程度予想されたとはいえ日本馬の敗戦を目の当たりにし、大きなショックを受けたものです。しかし我国の競馬関係者はむしろそれを大きな励みとし、その目を世界に向けてきました。その結果、馬の資質の向上はもとより施設の充実、馬を取り扱う人達の活発な海外交流などによるレベルアップがなされ、最近では欧米における日本産馬や調教馬の活躍振りが伝えられております。

一方では、競馬産業も当然社会・経済情勢の影響を受ける訳で、特にここ数年来の地方競馬の業績不振は非常に深刻で、生産地を含めた各所に先行き不透明な問題が発生しており、日本の競馬全体として取り組まなければならない大きな問題であろうかと考えています。

そうした中、昨年改正された競馬法が本年1月1日から施行され、今後は、国を初めとした関係者の連携の下に、競馬や軽種馬生産に係る様々な施策が展開されることとなります。JRAと致しましても、法改正の趣旨を十分に踏まえ、競馬主催者としての立場から、果たすべき役割を実行していく所存です。

育成部門に関連して言えば、きゅう舎を巡る制度も大きく動いており、その結果調教師の方々はトレーニングセンターの外の育成場に、それぞれ入きゅう

を待つ登録馬を待機させローテーションを組むようになってきています。待機する馬の調教、維持管理を含めた調教師との連携が馬の成績に大きく反映することとなり、その一翼を担う育成者の方々の役割はこれまで以上に重要なものとなってきております。そうした状況を端的に反映し、軽種馬育成調教センターにおいても利用頭数が増加しており、併せてその成果が具体的な成績となっていることから、育成段階での調教や飼養管理について皆様の前向きな姿勢が伝わってきます。今後はさらに育成部門の重要性が増していくことは必須であり、そこに携わる人材の育成、確保が更なる課題になると考えられますし、逆にそこにまた大きなビジネスチャンスがあるともいえるのではないのでしょうか。

さて、中央競馬につきましては、平成10年以来の売得金減少が続いており、なかなか下げ止まらない状況です。こうした局面を打開するためには、関係者がそれぞれの持ち場をしっかりと固め、“ファンの皆様の期待に応える競馬を提供する”ために、心を一つにして連携することが肝要であり、こうした努力を重ね合わせるにより、必ずやこの苦しい状況も打破される筈です。

生産・育成界においてもこの50年、めまぐるしい変化がありましたし、今後もその動きは止まることはないでしょう。こうした中、日本の軽種馬生産・育成界が目指すべき方向軸は“強い内国産馬作り”であり、外国産馬に対抗できる内国産馬を安定的かつ継続的に送り出していくことであると思います。改めてJRAの役目とは、スターホースを生み出すために生産・育成界の皆様が切磋琢磨するその活力を活かし、競馬全体が着実に歩みを進める体制作りをサポートしていくことにあるとの認識を新たにし、新年の挨拶をさせていただきます。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。